【勤務参考】100　　１６．２．５

技術開発官（船舶）

「勤務参考」最終章

勤務参考の配信を開始して既に半年近くが経過し、一応目標としていた第１００報までに既に達し、その最終章には、防衛技術協会誌「防衛技術ジャーナル」のフリートークとして寄稿したものを当てたいと考えた。すなわち、長い間艦船創りに携わることが出来、多くの先輩、同僚、部下のおかげで幸福な「ものつくり屋」人生であったことを代表する論述をもって最終章としたいからである。長い間のご愛読、乱読、積ん読に感謝します。

【艦船作り屋の真摯な雑念】

「海上自衛官の制服を着た技術者に求められる能力は？」とか、「艦船作りに携わる官の技術者に求められる能力は？」などについて、任官してから３０数年このかた自問自答を繰り返して（厳密には「繰り返させられて」）現在に至っている。

そして、その問いに答えを見いだそうとすると、必ずその前に「何のため？」という大前提の問いに突き当たるのである。さらに、これまた必ずといってよいほど「良い艦船を作るため」というキーワードを想念してしまい、「良い艦船とは？」というさらなる問いに確実に突き当たるのである。

この「良い艦船」については、諸説紛々であって、必ずしも的確な答えがないと思っているが、それでは思考が停止してしまうので、今では新進気鋭の時代に初めて触れたこの問いの答えとおぼしき文章を引用して次の論理を展開しようと試みることがいつもの習慣となってきていた。

それは、大先輩の技術開発官が残された言葉であり、「良い船とは、適切にトレードオフされ、適度に性能がバランスした船であり、あっと驚くような性能を持つ船は何かを犠牲にしている・・・」というものである。

このことをとりあえず納得しておいて、先の問いの答えを見つけようとするのだが、それでも的確な答えを導き出すのは容易ではない。だが、長くこの世界に居たおかげなのか、生来割り切りが良いのか、今では割りと単純に思考を展開してしまう。

すなわち、「要するに、適切なトレードオフ感覚と適度なバランス感覚を持ち合わせる」ことだと。また、あいにくそんな感覚を持ち合わせていないと自ら判断するならば「持つ努力」をすればよいのではと。

これは、具体的な能力を示すものではなく多分に感覚的で形のないものであり、これだけで「良い船」を作ることができるとは当然思ってはいない。ただ、若い艦船技術者に理念として教えるのには都合の良いキャッチフレーズだろうと思う。

実際に船を作りあげるためには専門的知識や経験が大きなウエイトを占めることはいうまでもなく、したがって現在でも思考展開の悩みが解消するものではなかった。

そんな折りに幸運にも次の言葉に出会うことができた。

それは曾野綾子氏の『辛うじて私である日々』のなかにある。

「真の専門家とはいかなるものか。」「それは総てのことについていくらか知っており、

或ることについては、全部知っている人だ。」という。そして「自分の専門について詳しいのは当たり前だが、同時に他のいかなる分野の勉強についても、関心を持ち、そのことを軽蔑しないことなのである。」とあったのだ。

すなわち専門的知識に加え、さらに幅広い知識の習得に努めることで、適切なバランス感覚が養えるのだと納得するに至った。

これでようやく冒頭の「能力は？」の問いに対してと答らしきものに到達したと錯覚することにしたのである。

「海上自衛官の制服を着た技術者」とか、「艦船作りに携わる官の技術者」は「艦艇創りの真の専門家」でなくてはならなく、「求められる能力」は「真の専門家足りうる研鑽によって得られる成果」を指す、と確信することで一連の問いと答が連結したように強く思い込め、最近はこれをもって持論とすることにしたのである。

２１世紀初頭の国際的な建艦技術競争の気配のなかで、我が国の防衛力の中枢を成す新しい艦船の創成、しかもそれを「良い艦船」に仕上げるためには、用兵者、技術者、企業を挙げて我が国の「真の専門家」が知恵を結集することが極めて大事であると考え、艦船作りに関わる方々に、この持論を押しつけようと決心し、折に触れてさえずっている毎日である。この状況は、まさしく一介の善良（？）な艦船作り屋が、「良い艦船」を作り上げるために必死にもがいている様子でもある。したがってこれを艦船作り屋の真摯な雑念として記憶にとどめていただき、同調・協力、あるいは指導・喧伝していただければさらに幸甚だと思う次第でもある。

完